

## 研究科に対する修了生の意見・評価アンケート

言語文化研究科では、平成 22 年 11 月 8 日（月）から 11 月 30 日（火）までの期間、インターネット上に設けたサイトで、修了生に対するアンケート調査を実施しました。同時期に院生へのアンケートも行いましたが、両者とも、研究科の教育研究や設備の充実と改善に資することを目的に、評価委員会が中心となって実施したものです。以下にそのアンケート結果と研究科からの回答を示します。

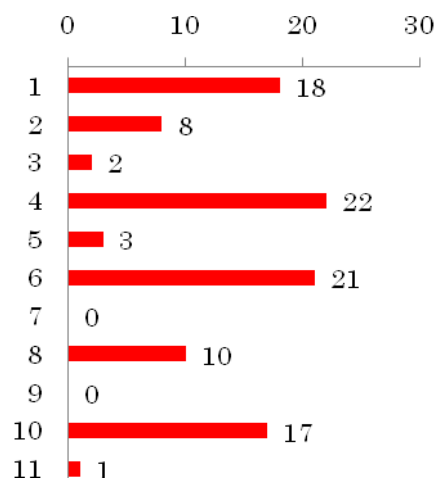
院生へのアンケート結果との比較のため、いくつか同じ質問を入れてありますが、その比較で目立った点にもコメントを付しました。

### 質問項目及び回答

質問 1：あなた自身のことについてお尋ねします。該当する項目にすべてチェックを入れてください。

【複数選択可】

- 1 国籍：日本
- 2 国籍：日本以外
- 3 性別：男
- 4 性別：女
- 5 専攻：言語社会
- 6 専攻：言語文化
- 7 本研究科の博士前期課程退学
- 8 本研究科の博士前期課程修了
- 9 本研究科の博士後期課程退学
- 10 本研究科の博士後期課程修了
- 11 その他（特別研究学生、特別聴講学生、研究生）



<回答>

国籍

日本	日本以外
18	8

性別

男	女
2	22

専攻

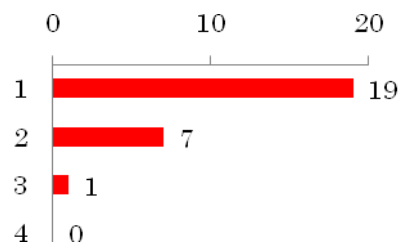
言語社会	言語文化
3	21

本研究科

博士前期課程退学	0
博士前期課程修了	10
博士後期課程退学	0
博士後期課程修了	17
その他（特別研究学生、 特別聴講学生、研究生）	1

質問 2：本研究科における在籍期間終了後の年数をお尋ねします。【1 つ選択してください。】

- 1 0～5 年
- 2 6～10 年
- 3 11～15 年
- 4 16 年～

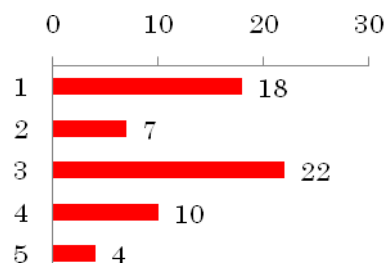


<回答>

回答番号	1	2	3	4
回答数	19	7	1	0

質問 3：言語文化研究科入学を希望した理由は何ですか。該当する項目にすべてチェックを入れてください。【複数選択可】

- 1 言語文化学を研究したかったから
- 2 研究指導を受けたい教員がいるから
- 3 修士や博士の学位を取りたかったから
- 4 就職に役立つと思われたから
- 5 その他



<回答>

回答番号	1	2	3	4	5
回答数	18	7	22	10	4

質問 4：上の問 3 で「5 その他」にチェックを入れた場合にはそれを具体的にお書きください。【記述式 400 文字以内】

<回答>

(言語文化専攻)

○言語学を研究したかったから

○研究室制ではないため、学生がある程度自由に研究テーマを決められ研究できる環境であると思っ  
たため。また自分の専門分野だけでなく、幅広い分野からも学べると感じたため。(入試の前に在学  
中の先輩数名に直接話を聞く機会を得たときにそのように感じました。)

○関西で生活をしてみたかったです。

質問 5 : 開講されていた授業科目の種類や数は十分だったと思いますか。【1 つ選択してください。】

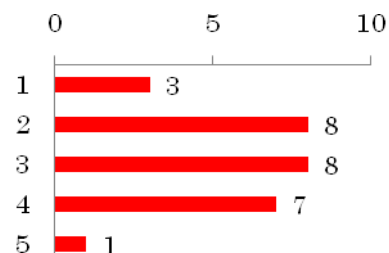
1 強く思う

2 そう思う

3 どちらともいえない

4 そう思わない

5 全く思わない



<回答>

回答番号	1	2	3	4	5
回答数	3	8	8	7	1

<コメント：院生アンケートと比べると「そう思わない」の割合がやや高くなっています。>

質問 6 : 上の問 5 で「そう思わない」「全く思わない」を選ばれた場合には、どのような種類の授業  
が開講されていたらよかったと思いますか。【記述式 400 文字以内】

<回答>

(言語文化専攻)

○学位論文執筆に当たっての具体的に学べるもの。

○例えば統計処理をきちんと学べる授業がなかったのは残念に思います。授業科目名と実際の授業内容  
が少し違うような授業もあったように思います。

○学部と院の垣根を無くし、相互の授業が取れるようになればよいと思う。学部で勉強したい授業があ  
る。

○本の章を翻訳して授業でそれを「勉強」することは役に立たないことだと思いました。家で本を読ん  
で、授業では質問や議論等が行われるほうが良いと思います。

○文化学を専門とする講座があればよかったと思います。つまり、文学畑出身ではなく、あくまでも文  
化を専門とする教官の講義を聞いたかったです。

○研究の方法や書き方などについて…

○フィールドワークの方法論の授業がなかった。講義要目には、フィールドワークの方法を教えると書  
いてあったが、実際は全く違ったものであった。

(言語社会専攻)

○授業の開講数等は充分であったが、キャンパスの移動等が伴い、それがとても不便であったため自分の取りたい授業をとることができなかった。時間設定や開講場所・期間には改善の余地があると思う。

質問 7：全体として授業内容に満足していましたか。【1 つ選択してください。】



<回答>

回答番号	1	2	3	4	5
回答数	4	12	8	2	1

<コメント：「どちらともいえない」以上の数値が高い（約 89%）のは、院生アンケートと同様です>

質問 8：研究や論文の指導体制に全体として満足していましたか。【1 つ選択してください。】

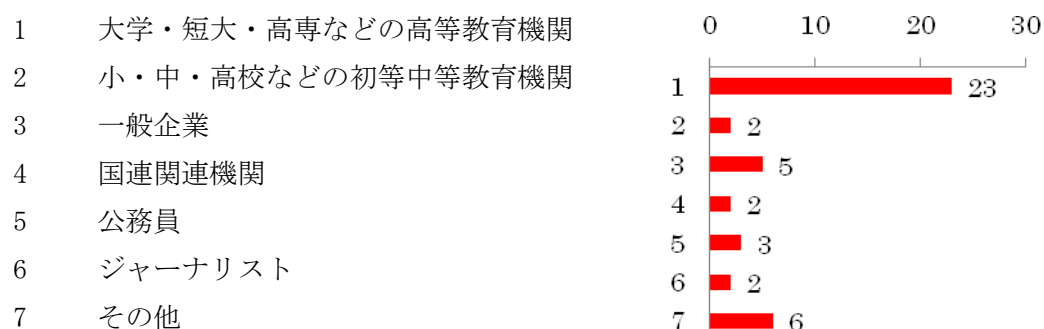


<回答>

回答番号	1	2	3	4	5
回答数	2	10	10	3	2

<コメント：どちらかといえば、3 年前の院生アンケートに近い数値を示しています。>

質問 9：修了後の就職先として、どのような職種を考えていましたか。希望していたものを 3 つ以内でお答えください。【複数選択可】



<回答>

回答番号	1	2	3	4	5	6	7
回答数	23	2	5	2	3	2	6

質問 10：上の問 9 で「7 その他」を選ばれた場合にはその内容を具体的にお書きください。

<回答>

（言語文化専攻）

○大学教員を第一志望とし、その一方で、翻訳に従事したいと思っていました。

○フリーランス

○日文研のような研究中心の機関

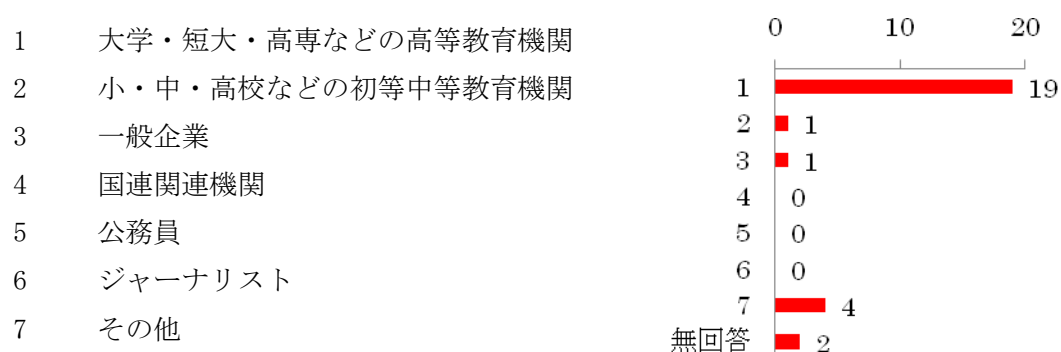
○既に、退職しており、就職の必要がない。

○外国人にサポートをする仕事。

（言語社会専攻）

○国際関係機関(国連関連以外)のプログラム応募。

質問 11：（お差し支えなければご回答ください。）現在、どのような職種に就いておられますか。



<回答>

回答番号	1	2	3	4	5	6	7	無回答
回答数	19	1	1	0	0	0	4	2

<コメント：修了生のみを対象とした質問です。「大学・短大・高専などの高等教育機関」の職に就いている回答者が多いことがうかがえます。>

質問 12：上の問 11 で「7 その他」を選ばれた場合、(お差し支えなければ) 具体的にお書きください。

【記述式】

<回答>

(言語文化専攻)

○国立大学法人准教授(当初の希望どおり、翻訳にも携わっています)

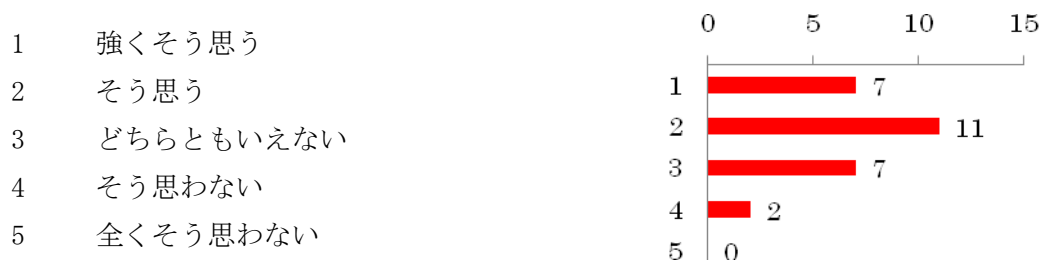
○年金生活をしている。

(言語社会専攻)

○国際交流基金の派遣による日本語指導助手(2 年間限定、任地は東欧)

○外国人にサポートをする仕事:JICE(日本国際協力センター)が実施している日系人労働準備研修のコーディネーターをしています。(滋賀県の湖南市)

質問 13：本研究科で学んだことが現在役に立っていますか。



<回答>

回答番号	1	2	3	4	5
回答数	7	11	7	2	0

<コメント：修了生の皆さんにとくに聞きたかった質問ですが、「強くそう思う」と「そう思う」を合わせた割合が約 67%と、かなり高い数値を示しています。>

問 14：上の問 13 で「1 強くそう思う」「2 そう思う」を選ばれた場合にはどのような点で役に立っているかを具体的にお書きください。【記述式 400 文字以内】

<回答>

(言語文化専攻)

○現在、研究をする上での手法、論理的思考等、研究に必要なことを教えて頂きました。

○文字どおり、研究の基礎(基礎研究への理解を深めるとともに、問題の所在を明らかにしつつ、自らの主張を論文にまとめ、議論を重ね、発表し、さらに研究を進めるというプロセス)を、丁寧に一歩ずつ指導して頂くことができたからです。また、海外で学位を取得するための準備を支援して頂いた

こと、帰国後、博士学位論文を仕上げられたことも、現在の私の仕事にとって大きな支えになっています。

○与えられた枠組みの中だけでなく、比較的自由にものを考える柔軟性を身につけることができた点です。

○視野が広がり、異文化に対する理解が深まると同時に、自分の精神生活が充実した。

○研究方法などが分かるようになったからです。

○研究調査の能力や日本語の語学力があがりました。

○言文で学んだことを、そのまま今の仕事で教えているから。

○研究したことを現在の職業に役に立っています。

○「研究する姿勢」を身に着けることができた。

○学部の際は知識を「吸収」することに重点を置いていたが、言語文化研究科の博士前期課程に入るやいなや、「オリジナリティを出すこと」が何にも増して重要であることを授業や研究指導の折に先生から言ってもらい、博士前期課程に入ったばかりの学生にはプレッシャーにも感じたが、今から考えれば一番初めにそのようなことを強く叩き込んでくださったのは非常によかったと思う。

○学部の際は英語が好きで、英語の文法を知りたくて理論言語学の勉強をしていたが、「理論」として理論言語学を捉えなければならぬことを叩き込まれ、母語である日本語にも目を向けることになった。これは自分にとっては大きな転換であったが、研究とは何たるものかが分かり、とてもよかったと思う。

○国際的な視野で研究をしている研究者が多く、自分の視野が大きく広がった。

○研究テーマの見つけ方、文献の探し方、分析の仕方、議論の仕方、学会への投稿の仕方、レジュメの書き方、発表の仕方、論文の書き方など、研究に関するあらゆることを授業をはじめ、指導教員の課題研究や言文内の研究会で学べた。そのことが就職してからの自分自身の学会発表や論文執筆だけでなく、卒論指導や修論指導で大いに役に立っている。

○現在、言語に関わる仕事についていますが、自分で意識的に、大学院で学んだ知識や考え方をもとに仕事に従事しているつもりです。

（言語社会専攻）

○普通の日本人が使う自然な日本語を身に付けたので、学生たちに具体的な例を教えることができ、学生により自然な日本語の会話を身につけさせられると思います。

<コメント：数多くの好意的な回答をいただきました。ここで言及されているような教育内容や教育方法を、今後も維持・改善していきたいと思います。>

問 15：本研究科の教育研究面、設備面に関してお気づきのことがあれば、以下に自由に記述してください。【記述式 400 文字以内】

<回答>

（言語文化専攻）

○私は1期生でしたから、全てが発展途上で、それがとても楽しかったです。足りないことももちろんありましたが、先生方と院生が協力し合って、環境整備してきました。色々な分野の先生方と親しくさせていただき、ご指導いただけたこともとても幸せな思い出です。

○院生室がうるさく、研究に集中できない。院生が談話する部屋と研究のための部屋の明確な区別が必要。院生自身のモラルの問題ではあると思うが、研究科側からの周知徹底も必要。注意する側にとって、注意することはストレスを伴うことであるし、する側とされる側に軋轢が生じることもある。図書について、必要な雑誌が無い。文学研究科に行けば入手可能な場合もあるが、言語学の分野では大変メジャーな雑誌であるにも関わらず、定期購読されていないことは大変残念である。

○私は非常に満足していますし、私自身の指導生が進学を希望した場合には、言語文化研究科をすすめると思います。

○設備・システムについて:就学時は、① PC の不具合が多発し、長期間使用できないことがありました。

② 5 限の授業は部活動の騒音が気になることがありました。③ 空調が上手く働かない教室がありました。④ 事務所が昼休み時間帯にクローズするのは不便でした。30 分ほどずらして下さると親切だと思います。⑤ 研究で容量の大きいデータを扱う必要があったのですが、高性能の PC が任意で使えるのはありがたかったです。高価な PC を自前で調達するのは不可能でした。ありがとうございました。

○院生室が十分に活用できなかった。また、共同のため、自分勝手にパソコン等を使用し、部屋の管理状態が悪かった。自分のパソコンと接続できる回線の充実が求められる。

○中間発表など、院生の発表に対する教官の無関心が問題だと思います。現在どのようになっているかわかりませんが、資料の閲覧室の開いている時間が短いため、ゆっくり閲覧することができない。

○論文の書き方等の授業があってもいいと思う。また、指導教官が論文指導する時間をオフィシャルに設定したほうが良いように思う。個人的にアポイントを取るとなると、忙しくされている教官に対して学生が遠慮してなかなか指導してもらえないので。

○研究するための環境が良かったし、設備がちゃんと揃っていて良かったです。

○指導教官との分野の違いが大きいというのは、入ってけっこう大変でした。

○院生室が広くてよかったが、研究する部屋と話し合う部屋が分かれていなかったため、外部の音をシャットアウトして研究に没頭したいときには、少々つらかった。「国際交流室」という名の湯を沸かしたりする部屋があったと思うが、こちらは少々狭く、またどちらかというとお茶を飲んだりしてつろぐ場所だったので、ここはここで研究について話し合う場所としては適切ではなかった。できれば別に「談話室」のようなものを設けていただくか、あるいは院生室を区切って、静かに研究できる部屋と議論する部屋を分けてもらえるとなお良いと思う。

○文学部と比べると、言語文化研究科はパソコンの数も多く、院生室も広く、設備が整っている。ただ、法学研究科や経済学研究科院生室には、院生一人一人に専用機が用意されており、勉強がしやすい環境が整っているので、そのようにできれば良いと思う。

○オーディオ機器を利用しようとしても、その使用方法を管理者(鍵を預かっている方)が知らず、利用できないことが多々あったので、改善してほしい。

○文学部でおこなっているような、ゼミ形式を採用してほしい。半期ごとの科目では、同じ学年のものばかりが集まることになり、未熟なままである。学部生から院生博士後期の学生までが同じゼミで発表や批評を行うことにより、未熟な学生がどのように自分の研究を発展させていくのかが理解できる。(言語社会専攻)

○なかなか入手したい本が手に入らず、また、専攻によって学習環境が大きく異なる。研究室も自分の机がない、自由に使えるスペースが狭いなど、研究や勉強に専念するにはさらに改善の余地があると



思う。

＜コメント：好意的な回答も含め、数多くの投稿をいただきましたが、質問2への回答にみられるように、回答者が本研究科に在籍した時期にかなりのずれがありますので、回答の背景となる状況もそれぞれ異なっていると考えられます。したがって、個々の意見・要望に的確に答えることは困難ですが、現在も残されている問題と現在ではほぼ解決されている問題、その両方が含まれているように思います。

たとえば、共用の部屋の適正な利用、図書やパソコンなどの設備の充実などの点は、院生対象のアンケートでも指摘されている点です。これらの点については、院生アンケートへの回答でも述べた通り、院生の皆さんに意識の向上を促したり、大学院充実費を効果的に運用したりすることによって、改善の努力を続けていかなければならないと考えています。一方、現在実施されている、各教員のオフィスアワーの設定、指導教員変更の制度、学生相談室の設置などにより、以前よりはだいぶ改善されている点もあるのではないかと思います。

院生室の仕様などについては、院生同士での話し合いも必要でしょう。その他、研究指導や授業内容に関する指摘については、研究科としても真剣に受け止め、改善すべき点についてはその方法を探っていきたいと思います。＞

質問 16：修了後の進路に関して、本研究科からの就職等に関する十分なキャリア支援はありましたか。



＜回答＞

回答番号	1	2	3	4	5
回答数	4	2	5	10	6

＜コメント：「なかった」「全くなかった」が全体の約 60%を占めています。＞

質問 17：修了後の進路に関して、本研究科からの就職等に関するキャリア支援について、どのように考えておられますか、具体的にお書き下さい。【記述式 400 文字以内】

＜回答＞

（言語文化専攻）

○研究科としての支援は何かあるのですか?同じ分野の先生方からは1, 2 度、公募の情報を頂いたことがあり、実際に面接に伺ったこともありますが、研究科としての支援を何かしておられるのでしょうか??? 院生紹介用のホームページを作成されたことくらいしか思い浮かびません。

- 私は、指導教員の紹介で、各種研究会のメンバーとして、研究発表や共同研究に従事することができ、そこから就職の紹介を頂くことができました。就職相談の窓口を訪問したわけではありませんが、私は研究科から直接的にも、間接的にも種々の就職支援、キャリア支援に相当する支援を頂いたと考えています。
- 私の印象では同期のうちおそらく三分の一ぐらいは研究機関の常勤職についている印象ですが、その他の非常勤職、民間企業に入られた方は、必ずしも初期の志と違う結果かもしれません。現在は研究機関への就職状況はもっと厳しいですし、入学時に就職状況等の将来的展望について具体的な説明があると助かるとおもいます。
- 研究科から支援があれば心強いです。私は1期生で、友人も皆ほぼ自力で道を切り開きました。それを不満に思っていないませんが、学んだことが活かされる道を示唆してもらえるだけでも、励みになると思います。
- 専用の窓口があると、学生には安心だと思います。当時は、修了生がどのような職につかれたのかも噂で知る程度でほとんど分からないような状況だったので、どのように就職活動をすればいいのかも手探りの状態でした。
- 大学院の事務に電話してみたら、卒業後には支援がもう無いと聞きました。
- もう少し、院生の就職について熱心になってほしいと思います。
- 就職指導部を作るなど、もっと積極的にサポートしてほしい。
- 阪大文学部は、先生が就職を斡旋してくれたりするとも聞いている。院生の人数が少ないからできることかもしれないが、違いを感じていた。
- 言語文化研究科修了後、大学・短期大学の非常勤講師の紹介を得たのは、学部時代の大学の先生からであった。伝統がある研究科では、縦のつながりが強く、先輩から後輩へと非常勤講師の紹介があるようであるが、言語文化研究科はそういうつながりがない。言語文化研究科の良いところでもあり、少々悪いところでもあるのが、一つの専攻であることから、同じ研究分野での「縦」のつながりが少々希薄であることである（在学中は同分野の在学生の「縦」及び「横」のつながりがあるが、修了後は個人レベルでは「縦」のつながりがあっても、組織的にはあまりつながりがない）。同分野での「縦」のつながりが続いたための、言語文化研究科としての組織的・公的な何かがあれば（たとえば簡単などころでは修了生も加えた分野別のメーリングリストなど）非常勤講師のあっせん等、就職等のキャリア支援にもつながると考えます。
- 博士前期の1年目に、各学会についてその特徴などを教えてほしい。また、発表するにはどのようにしたらよいかなど。
- 大阪大学の学生は、大学の支援がなくとも勝手に就職先を決めてくるため、就職支援が他大学ほど手厚くないと、就職活動中に就職支援担当の方に伺いました。ただ、本研究科は他大学の学部卒の学生が多く、実際、就職情報を必要としている方が多いと思います。修了生で社会人をしておられる方を招いて、就職相談会などの機会があっても良いと思います。
- （言語社会専攻）
- 進路が専門性の高い場合が多いので、もっと支援してほしい。先輩からの情報など、具体性のある情報がほしい。

<コメント：本研究科における今後のキャリア支援の方向性を探ることを目的に、修了生の意見をうか

がいました。結果としては、院生からの回答と同様、本研究科のキャリア支援がほとんど不在であるという感想や、その充実を求める要望が数多く寄せられました。

院生アンケートへの回答でも述べた通り、本研究科がキャリア支援のための本格的な部署を設けることは、今のところ不可能といわざるをえません。しかし、上の回答のなかにも含まれているアイデアですが、同窓会組織を強化すること、そしてその同窓会の組織と研究科との連携を、これまでよりも緊密にすることが、ひとつの現実的で有意義な方法ではないかと考えています。言語文化研究科も今年度で 22 年目を迎え、多くの修了生が全国の大学・短大・高専などに就職し、現在もその数は増え続けています。これらの同窓生のネットワークを強化するとともに、その同窓生組織と協力して、修了生による講演会や相談会を企画するなどの支援策を実行していきたいと思っています。

そのためには、修了生の皆さんの協力が必要なことはいうまでもありません。本研究科のキャリア支援を充実させていくためにも、修了生の皆さんには、なお一層の協力をお願いいたします。>